
消え逝く死神

香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

消え逝く死神

【Nコード】

N7767X

【作者名】

香夜

【あらすじ】

「兄ちゃん。僕…死ぬ、のかな…？」

弟、雪は虚弱^{じやく}体質^{たいしつ}で兄の氷^こに世話^{じやわ}を焼かせていた。雪が五歳に喘息で死にかけた時以降ずっとだ。そんな二人の両親は今仕事で海外に飛び回っており家にはいない。幸い金銭面では困ってはいないものの雪がよく倒れるので病院にはお世話になりまくりであった。ツンデレな兄は弟の為に様々な配慮と家事を頑張っている。

そんな兄弟愛がメインのお話

兄ちゃんと僕（前書き）

シリアス、ほのぼの、恋愛とは違った兄弟愛、過保護な兄ちゃん、甘える弟、と言う話を昨日見た夢で思い付いたので書かせていただきます。

主要人物は基本、弟の雪と兄の氷でその他は友達や先生、両親と言った具合でございます。

ボーイズラブ
BLではありません。

小分けに書いていきますが次話は少なくとも3日以内に投稿させていただきます。

興味を持って戴けましたら、どうぞ宜しくお願い致します。

兄ちゃんと僕

昔、病院で見た死神は涙を流していた。

横たわる年老いた爺さんの前に立ち、大きな鎌を持ってぼろぼろ涙を溢してた。

その時僕はまだ五歳でよく分からなかったけど死神を見ていたら何だか泣けてきたんだ。お母さんには不思議がられたけど涙が止まらなくて悲しくなっ…

「…き！雪！おい！」

ここは何処だ？

「雪！起きろって！」

…兄ちゃん？

「もう7時だぞ！！」

兄ちゃんは中々起きない僕にチョップを食らわした。

ここは僕の部屋、さっき僕の額にチョップをしたのが兄ちゃん。今は7時で中学校へと登校するのが7時半、なので急がないと遅れてしまう。…よし、覚えてる

自分の記憶を呼び覚まし、起き上がる。

「兄ちゃん、痛いよ」

今さら痛みが込み上げてきたので起きて開口一番文句を言ってしまった。

「雪が早く起きねえからだ」

そう言った兄ちゃんはタンスから僕の制服を取り出し差し出した。僕はそれを受け取り、お礼を言う。

てつきりそのまま部屋を出ていくかと思ったのだが兄ちゃんは立ち止まり、じつと探るように僕を見てきた。

「……何？そんなに僕の着替えるところ見たいの？」

さっきの仕返し（ほぼ逆恨みだけ）で皮肉を言ってみた。

「バツ！ちげえよ！何勘違いしてんだよ！」

ツンデレか

「じゃあ何？」

「べ、別に心配してる訳じゃ無いんだけどよ…今日は咳大丈夫、か？」

これは僕が喘息で死にかけた時以降、毎日問われる事だった。

「ああ…大丈夫だよ」

（ちなみに少しでも兄ちゃんの前で咳をすると即ベッド送りにされて無理強いで学校を休まされる）

「そうか。あ、早く着替えて下降りてこいよ！」

一瞬安堵の表情を見せ、またいつものツンツンした表情に戻る。ちよつと見ていておもしろい。

着替え終わりそうこうしているうちに7時半になった。

「兄ちゃん、行ってきます」

「おう」

「今日は16時に終わるから」

「よし、んじゃ16時にいつもの所で待ってる」

この会話も毎日行われ、あの日以降ずっと繰り返られる会話であ

った。

兄ちゃんは少しでも僕を見守りたいらしく高校を早退してまで僕と下校を共にしたがる。ただし登校時は家でやる事が沢山あると言い、一緒には行かない。

「お。恵ちゃん達が来たぞ」

僕がのたのたと靴紐を結んでいるうちに友達が来た。

恵と裕太と由香だ。

「遅いよ、雪君」

仁王立ちで僕を待ち構えていたのは恵だった。

「そやで！遅いでー、雪坊！」

家から出てきた僕に皆口々に文句を言ってくる。

責められるのは好きでは無いので軽くあしらうといつもの皆に戻った。

その後、学校に着き特に普段と変わらない1日を過ごす。

だが、最悪な事に6限目の体育（野球）に急に意識が無くなり倒れてしまった。

夢を見たのだ

少し成長した僕はベッドに横たわり、目をつむっている。
その横には死神と兄ちゃん。

二人とも泣いていた。無表情で無音でただぼろぼろ機械のように涙流して怖かった。

「僕、死んだのか…？」「嫌だ。まだ死にたくない」「助けて」「誰か…兄ちゃん、助けて」「死にたくない。死にたくないよ、兄ちゃん」「助けて、助けてよ！苦しい！助けて助けて助けて！！」

「助けて…」

いつの間にか伸ばした手を誰かに掴まれた。

「雪！！！！」

「にい…ちゃ、ん」起きた瞬間鼻に霞む消毒液の臭いと心地よいベツド。…保健室にいるのか。意識がはつきりしてくると色んな感情がドツと出てきた。

目覚めた安心、夢だったという安心、兄ちゃんがいた安心、まるで泣いた後のようなスカツとした気分が入り混ざった感覚…。

しばらくその感覚に酔っていると兄ちゃんが話し掛けてきた。

「…なあ、雪。何でいつも寝てるとき泣いてるんだよ？」

「？」

何故か反応して飛び起きてしまう。

「僕が…泣いてる？」

「ああ」

泣いてる？いつも？

別に大した問題ではないのに、明らかに動揺する自分がいた。

「…あ……」

もしやと思い目元を触ると、湿つたい。

僕は毎日兄ちゃんに泣き顔を見せていたのか…

情けなさで恥ずかしさが同時に出てきた。

「ま、別に見てみぬふりしてやらんでもないけど」顔が沸騰していく僕を見て兄ちゃんが傍目を見つつ言う。そして付け足しのよう

「こ、これは皮肉だからな？」と。

「ありがと」

僕が笑った事に安堵したのか、礼を言われ気を良くしたのか、兄ちゃん
は微笑み立ち上がった。そして…

「さ、病院に帰るか！」

家に帰ってたかった。

兄ちゃんと僕（後書き）

変な終わり方の方が次書きやすい！…と云うことで、実にすみません。

色々反省したいところですが、なにぶん反省文を纏める能力に欠けているので省かせていただきます。

私の小説でお楽しみいただけただけならば幸いなのですが、お楽しみいただけなかったのなら本当にすみません。

次話も読んで下されば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7767x/>

消え逝く死神

2011年10月21日00時04分発行